

開催地名：広島県竹原市	
開催日時	令和3年11月21日（日） 9:00～11:00
開催場所	ホテル大広苑 1F コンペンションルーム
語り部	吉田亮一 （宮城県仙台市）
参加者	自治会、防災リーダー、市避難所運営担当者等 約100人
開催経緯	過去には土砂災害や洪水災害、高潮災害は経験しているものの、市域では大きな地震や津波の経験がないことから、要配慮者等の避難対策を含めて、対応に不安な要素がある。特に地震等の大災害時の場合は多数の避難者が想定されるため、避難所運営体制の在り方は喫緊の課題である。
内容	<p>(1) 東日本大震災の体験談について</p> <p>地震発生時は、宮城県仙台市太白区に滞在していた。大きな揺れが3分程度続き、揺れが収まった後は吹雪が吹いた。まずは一時避難場所である公園に避難した。備蓄倉庫から物資を取り出し、ペール缶に薪を積んで暖をとった。そしてテントを張ってブルーシートを敷いて風よけをした。避難者の中には、たった1人で避難してきた小学生低学年の女子児童もいた。一方、指定避難場所である中学校では、中学生が避難スペースの設営準備をした（太白区では35の小中学校を指定避難場所として開設し、そこに人口約23万人のうち19,600人程度が避難した）。設営準備完了後、指定避難場所へ移動した。自身が避難した場所の滞在期間は17日間であったが、22日間を要した避難所もあった。ライフラインの状況は、電気は5日間、ガスは4週間、水道は2週間程度停止していたが、発電機と灯光器を用意して明るさを確保した。その後、炊き出しの準備を行い、避難者へ配布した。避難場所では、中高生などの若い世代が率先して活動してくれた。避難場所に移動することが出来ず自宅にいる住民に対して、小学生がプールから水を汲んでポリタンクに移し、そのポリタンクを高校・大学生がリアカーに積んで配達した。自衛隊からの支援物資が届いた際には、台帳の作成や物資の仕分けを担った。他には、集積場の準備や掲示板の作成などを行った。</p> <p>(2) 地域全体で取り組む訓練の重要性について</p> <p>災害を想定した避難訓練や活動などは、町内会・自治会・学校などの各施設で避難経路や備蓄品・役割をしっかりと協議をするなどして、「地域全体」で取り組むことが必要である。特に、災害時の行動を学ぶ「子ども会」の実施や、学生と地域住民との合同訓練の実施などは非常に重要である。実際</p>

	<p>に、東日本大震災発生時の太白区で、一時避難場所に女子児童が一人で避難できたのも、指定避難場所になった小中学校の学生達が率先して行動してくれたのも、「地域全体」を意識した訓練・活動を行ってきた成果である。</p> <p>また、避難訓練においては地域住民全てが参加するのは現実的ではないため、平日や日中に自宅にいる人・働いていない人に主体となって参加していただくことが重要である。働いている人は、災害発生時には帰宅困難者となってしまったり、勤務先の復旧作業などに追われたりするため、災害発生時に主体となって行動できない可能性が高いためである。他には、実施時間は昼と夜を交互に実施する、各々の自宅から開始するなどして、本番を想定して行うことも重要である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>平成30年7月豪雨の被災以降、大雨、土砂災害に対する対応に取り組んできたが、今回お話しをいただいた東日本大震災を教訓として、南海トラフの巨大地震や直下型の大地震に対する備えについて、町、町民、事業者と協働で取り組んでいきたい。</p>